

# 東北公益文科大学 総合研究論集

第 28 号

対象関係論の存在論的基礎付けによるケースワーク及び  
地域福祉の実践理論のための素描（前半）

佐野 治

2015 年 7 月 21 日発行

## 研究ノート

# 対象関係論の存在論的基礎付けによるケースワーク及び 地域福祉の実践理論のための素描(前半)

佐野 治

## はじめに

筆者は、東北福祉大学付属社会福祉相談室、板橋登美氏（当時、室長）との共同創設（1990）に始まり、児童家庭福祉、高齢者福祉の分野で現在に至るまで、相談援助に携わってきている。Hamilton,G.、Perlman,H.H.に師事した恩師でありまた実際に筆者が担当するケースのスーパーバイザーでもあった板橋氏の影響もあって、大学で教鞭を執る傍ら診断主義ケースワーカーとして、また大学時代（哲学科）から追いかけてきたHeidegger,Mの現象学的存在論を思想的背景とし、面接を通してクライアントの生活支援に関わってきた。Freud,S.の精神分析や自我心理学などを基礎理論として組み立てるケースワークの援助理論と同じく、精神分析とHeidegger哲学を精神療法に役立てようとするBinswanger,L.、Boss,M.らの現存在分析（論）へとは容易に接続していった。

## 問題意識

現存在分析論を提唱するBossは、Freud,S.とHeideggerに直接師事し、Heideggerと二十数年にも渡る親交の中で、逆説的ではあるが現存在分析論が精神分析に対して「測りしれぬほどの寄与」を為し得たと評価する。『人間存在の根本構造への現存在分析論的洞察によってはじめて、われわれは精神分析理論という二次的「思弁的上部構造がいかにも不十分なものであったかを、またそれ故Freud,S.自身の忠告どおり投げ捨てられてよいもの」<sup>1</sup>であるとの認識に至った。そして「Freud,S.の分析プラクシス全体」の中にHeideggerの「人間への洞察」を見出し、「現存在分析論的な人間理解がもたらした、いかに

高く評価してもしすぎることはない利得は、、、種々の仮定の中でも、とりわけて《無意識》という、根底においては無用な仮定を完全によけいなものとして廃棄<sup>2)</sup>していった。無意識という仮定なき臨床存在論ともいべき Heidegger 哲学の忠実な実践者であった。

Freud,S.の「プラクシス」の精神を受け継ぐBossの現存在分析論をケースワークへ直に導入する場合、理論の難解さと平行して容易に伝達可能な援助技術、とりわけ面接技術として根付かせることができるのかという疑問はそうしたやすく払拭できない。加えて「二次的思弁的上部構造」について、Boss自身も「多くの患者が単にあれやこれやの心理主義的象徴理解に導かれるだけで治療していくのは何故か」<sup>3)</sup>と問い、「現在のところでは、これについてただ次のように答えるしかないであろう。つまり、多くの人にとっては、この種の解釈がもつ心理学的理論的な遮蔽を透過して、言い求めをうけた諸現象の直接的な全き現実性（ヴィルクリッヒカイト）が、十分に顕現しうるからである、、、とりわけ分析医自身が、意識的ではないにしても事実上、患者との共人間の出会いに際して、事物のありのままの内実に向かって開かれてあるとき、とくにそうなのである」<sup>4)</sup>と、やや苦しそうである。Bossの現存在分析論の人間理解を引き継ぎ、無意識という仮定を使用せず、なおかつ「二次的思弁的上部構造」を投げ捨てることもなく、容易に伝達可能なケースワークの基礎理論、地域援助理論、面接技術へと具現化することはできないのか。

そこで筆者が選択した「上部構造」は、Freud,S.以後の精神分析の流れの中で早期母子関係を重要視した「対象関係論」である。なぜなら、BossがFreud,S.のプラクシス全体の中に読み取ったように、Bossを継承し、仮説を廃して、「二次的思弁的上部構造」をぎりぎり維持する、さらに援助技術として成立する可能性を感じることができるからである。

## 研究の素描

本研究は、対象関係論の主要な仮説（心的メカニズム）を Heidegger の存在論から、Bossが実践したように、忠実に理論的にも基礎付けることである。もはやそこでは、対象関係論そのものではなくなる。しかし、この二次的思弁

的上部構造（対象関係論の概念）は、Heideggerが『現象学の根本問題』において存在了解を説明するために用いたプラトンの「洞窟の比喩」<sup>5</sup>や世界内存在を文学で紹介したリルケの『マルテの手記』<sup>6</sup>と同様に扱われるようになる。クライアントへは比喩（文学あるいは方便のようなもの）として、ケースワークの「面接技法」のひとつとして形を変えて使われる。臨床実践の積み重ねによって形成されてきた対象関係論は、比喩等になっても大きな魅力を放つ。というよりも元来人を癒す力を持った理論だったのであろう。だからこそなおさら、仮説を廃止し、存在論による基礎付けが要求されているように思われる。

## 存在論と対象関係論の関係例

本研究の目的は、対象関係論を無意識や空想、内的世界、投影などといった仮説を設定することなく、Heideggerの存在論において基礎付け、Bossの人間把握を継承しつつ、比喩として対人援助に用いることである。はじめにHeideggerが考える対人援助のあり方を示しておく。

「わたしたちは心理学や社会学や精神療法に従事していますが、それは人間がもっとも広い意味での適応と自由という目標を達成するのを援助するためです。、、、個人のあらゆる社会的障害、あらゆる病的障害は、適応と自由の障害だからです」<sup>7</sup>

この適応と自由に向けて現存在がなすべきことは、「配慮されるものがすっかり手に負えるようになったあとで、これをあとから引き取る、、、このような待遇では、、、相手は依存的になり、、、支配」される。「相手に代わって飛び入りをするというよりも、むしろその実存的な可能性において相手に率先」し、本来の意味で「配慮」すべきこととして相手に還すことで、「彼が関心において透視的になり、それへ向かって自由」になることである。<sup>8</sup>

また、ビンスヴァンガーの踵恐怖の女性患者の事例分析において、Heideggerは「女性患者の世界関係が道具連関の障害によってどのように障害されるのか、それを研究しなければなりません。手もとにあるということ〔道具的にあるこ

と（Zuhandenheit）]が損なわれている」<sup>9</sup>と述べ、道具連関の障害の研究の必要性を説く。

幻覚を理解する際にも「現実と非現実の区別から出発するのではなく」、<sup>9</sup>「世界との関係における不自由さ、自分の世界の中を自由に動くことができない」<sup>10</sup>問題として把握するよう促している。また純粹に内的世界とされる夢においても世界内存在として切り離すべきでないという。

「夢を見ている世界内存在と目覚めている世界内存在との区別がそもそもその内で生起する次元なのです。だからこそ、夢の世界（Traumwelt）を一つの独立した対象領域として切り離すことはできないのです。夢の世界はある種の仕方で世界内存在の連続性の一部となっており、それ自身もまた同様に一つの世界内存在なのです」<sup>11</sup>

さて、対象関係論では、子どもの世界、特に発達の最早期の内的、外的世界の相互作用を問題するが、世界内存在から把握する点では、同様である。

「断片的に出会ってくるにすぎないものや、子供の世界の場合のように、ある現存在にあって素朴に了解されているにすぎないかもしれないもの、こうした世界内部的な存在者もまたすべて、世界内部的なものである以上、いわば世界を背負わされています」<sup>12</sup>

Heideggerが説く世界内存在は、世界に慣れ親しんでいること、世界内部的存在者と交渉していること、つまり根源的には道具的存在者と関わり合っていることを意味する。こうした道具との交渉は配慮といわれる。つまり、

「あたかも乳児が前もって母親を母親として、ことさらにその乳房を母親の乳房として認識しておいてから、その母親へと出向いていくのではなく、常にすでに母親の胸もとへと差し向けられている（託されて）しまっているのと同様である」<sup>13</sup>

## 対象関係論の概念の存在論的基礎付けの一例

乳児の世界内存在において、母親の乳房（哺乳瓶）はミルクを飲むための道具として出会う。哺乳瓶等が破損しているなどの場合、子どもにとっては使用不可能性が発見され、道具の事物性が現れる。そしてすぐに修復中のものとして道具性へと身を潜めていく。同様に、不在という状態においても、手元がないことに気がつく。不在の発見は、ただ存在するだけの事物性も同時に発見されてくる。乳児にとってこの不在は平静を乱され、ひときわ目立ったものとして現れてくるのである。この道具的存在者が「押しつけがましき」や「手向かってくる」中で、事物存在性も見せつけられる。そして「内存在そのものが、内世界的に出会ってくるものによって迫られるという形で実存論的にあらかじめ規定されている。、、、すなわち心境が、、、世界を、たとえば脅迫性を見越して、すでに開示」<sup>14</sup>しているということである。よって、クライン派がいう迫害者や迫害対象として存在的に現れてくるのである。

そしてこの道具的なものあり方のうちに、ミルクを適切に提供するのかそうでないのかによって、つまり「良い母親」、「悪い母親」という姿ですでに居合わせているのである。いずれの母親も道具的に存在しているその子どもの世界から出会ってくるのである。

クライン派の不安の概念と存在論の不安、死の本能と死への存在、罪悪感と負い目存在、象徴機能と指示連関、意識化と想起、その他の概念についても後半で紹介する。

## 仮定なき対象関係論のケースワークへの応用

ここで筆者が対象とする福祉領域のケースは、いずれのクライアントの生活において「何となく不安」「自分に自信が持てない」「対人関係が非常に苦手」等を主訴とするもので、文字通り生活支援のためのケースワークであることを断っておく（緊急性を要するものや重症の精神障害の患者ではない）。

対象関係論の概念のうち、ほとんどのクライアントが自らの「迫害不安や被害感情」、その他投影同一化の諸々の役割の自覚化が進むにつれ「不明な迫害

者から当面の迫害者へ」、そして「本当の迫害者」を特定し、それらが本当は誰の、どのような感情であったのか、その目的、それは誰をまた何を守るために、何をしてきたのか（理想化、否認、躁的償い）が明確になっていく。それを契機に一旦は落ち込み、悲しくなるが、気持ちが楽になっていったと述べている（実際以下で紹介するAさんの不安は完全に消滅した）。

例えば、自分の子がかわいく思えないと悩む母親、自分のDNAを残したくないために実子を持ちたがらない父親、子どもに手をあげてしまう親、高齢者介護に不安や不満を持つ介護者、軽い認知症の高齢者、ゴミ屋敷の住人、支援拒否等の困難事例、投薬を受けながら会社に通ううつ病患者の将来不安、自分や将来の自分に自信がないという学生、利用者に冷たい対応、かたや過剰なまでに献身的に仕事に打ち込む施設職員、家族を顧みず地域活動に没頭する自治会役員や民生委員、社会福祉協議会職員などである。多くのクライアントはこの心的メカニズムに納得感を持ち、「何か分かるような気がする」「そうだったのか」「気持ちが楽になった」「不安が減った」などと話している。

今回、上記のクライアントの中で、20数年らしいの不安を持ち続けてきたAさん（40歳代、女性、派遣社員、夫婦世帯、持続的で慢性的な不安を解消したいというのが主訴）をはじめとする数人のクライアントに面接を振り返ってもらった。ここでは、事例研究を進めていくわけではなく、ひとつの具体的技法の試論である。

筆者が対象関係論の主要な概念、生と死の本能、内的世界、分裂、投影同一化、迫害者、迫害不安、被害感情、象徴化、理想化、否認、躁的防衛等をもとにして作った「比喩」を口頭あるいは文章で提示し、クライアント自身が自らの生育歴に重ね合わせ、面接を通して気づきを促すというものである。

この学派の心的メカニズムは、誰もが共感しやすい子ども時代の純粋で悲しい物語が、そのメカニズムそのものの中に存在する。この学派を選んだ筆者の理由はここにもある。個人に合わせてこの物語は改変されてクライアントに提供される。以下、Aさんに対して筆者が作成し、面接（本研究においては面接2回分）で用いた比喩の概要は以下の通りである。ところどころに当該学派の概念が入っている。

## 比喩（物語）の例

母親から相手にされずいつも素通りされ、本当の自分の気持ちを歪められて理解されていた子どもAさんは、いつも放っておかれることに甘んじていたわけではなく、お母さんに聞いてもらいたいこと、正確に気持ちを受け取ってもらいたいことがたくさんあったはずだ。しかし、どこかでそれをあきらめなければ、子どもながらにつらすぎる。何も構ってくれないことを良しとする子どもなどはいない。お母さんに言いたいこと、歪めずに分かってもらいたい気持ちは、ただ聞いてもらえていないという悲しさだけではなく、なぜ聞いてくれない、なぜ分かってくれない、なぜ歪めるのか、分からせたい、思い知らせたい、つまり自分を悲しくさせる母親への怒り、恨み、復讐心（報復）をその中に包み込んで溢れ出さんばかりに緊張、膨張し、心の中ではいつもしくしく泣いているのではないのか。そしてその悲しさは、いったいどこに行ってしまったのか。それは自然に消えてなくなるのか。そんなはずはない。愛されていないと感じる子どもは、恨みや復讐心を抑え込んだ悲しさにとても耐えていく力は持ち合わせていない。一番好きなお母さんに本音を語ることもできない悲しさ、心の中では泣いているにもかかわらず、気づいてもらえない。母親に対するあきらめの悲しさ、恨み・分からせたいという報復心は、苦痛すぎて、その気持ちを忘れるしかない。しかしこれを子ども自身の意志では到底できるはずのないものである。何かの力が働いているのか。言えることは、強烈な感情があったことだけは分かる。悲しすぎるつらさによって、自分自身が圧倒され、おかしくならないよう、自分を守るために知らないうちに忘れようとしてしまうのかもしれない。ここにそうせざるを得ない子どもの切なさがある。愛する大好きなお母さんを恨み憎む気持ちを感じることもつらいことである。なぜなら愛されている自分もどこかで感じているからだ。これからも愛されたい自分がある。だから子どもは母親が大好きなのである。母親からうとまれても、けなげな子どもは必死に気に入られようと努力し、母親をまね、母親の思う子どもの姿に自分を合わせていく。この好きなお母さんに対する恨みと復讐の気持ちは、どこに行ってしまったのか。その気持ちを分かってもらうために、分からせるために、自分のこの気持ちがお母さんの中にあるように思う。お母さ



んの中に自分の悲しさや恨みがある、その中に憎んでいる自分がある。お母さんといっしょにいれば分かってもらえるだろう（分からせられるだろう）と子どもながらに思うのかもしれない。しかし、それは子どもの一方的な思い込みにすぎない。お母さんの姿をかりて、悲しさや恨みに満ちた自分がそこに閉じ込められている。子どもにはそれが自分だと思えることはできない。なぜなら自分でも知らないうちにお母さんの中にちょこんと住み込んでいるのかもしれない。しかし、あくまでも目の前にいるのは、大好きなお母さんなのである。忘れることによって自分から排除した悲しすぎる感情は、少しは和らいだ。でも、お母さんから恨まれ、憎まれていると思ってしまうのである。この思いはどんどん大きくなっていくように思う。悪い状態の母親とそうでもない時があるが、特に憎まれている感覚が高まるときに限って生活意欲が低下し、すっかり自信をなくしてしまう。子どもにはそれがなぜだか分からない。これはその後、自分のことを尊重せず、粗末に扱っていると感じる友人や先生にも同じ思いを感じてしまう。しかし、友人に粗末に扱われているという明確なものはない。ただ好まれてはない、相性が合わないだけ思っているぐらいである。次々に同じような思いをさせる人が自分の周りにはたくさん現れてくる。学校で友人から嫌われていると思う、最初は自覚されず、意欲の低下、自信の喪失という形で意識されるものである。

また子どもはいつまでも自分を分かってもらえず、憎まれていると思うことはつらいので、かすかに自分が愛されている一部を拡大して、理想的な母親をつくりあげる。自分は愛され、理解されていると思うことができるからである。そして子どもに無関心な母親とは認めず、自分と母親との現実的な関係の悪さも認めない。自分は大切にされていると思ひ込み、決して誰にも母親のことを悪くいう気にはなれないのである（事例の前半）。

上記みた比喩は、対象関係論では次のように表現される。

子どもは心を持って誕生する。その心は空間的な広がりを持っており、主観的な世界である。この世界は「内的世界」ともいわれ、本能や欲動という心的エネルギーを原動力として形成される。内的世界、内的現実とは、子どもを取

り囲む客観的な世界である「外的世界」との相互作用により形成される。

人間の内部から発生する本能は、外的世界（自然界や人間界）を生き抜くために、他の動物にはない人間に生得的で特有の関心を持つものと仮定される。外的世界との相互作用で形作られる内的世界や精神世界も人間特有のあり方をしているであろう。この内的世界の形成に大きく影響を与えるものは、最初の外的世界、それは、子どもの主観的内的世界から見ると母親である。母親の全体像が形成されえない子どもの側から見るとお乳を飲むために差し向けられた目の前の乳房や哺乳瓶（以下乳房）が、最初の「対象」となる。しかしこの対象でさえ初めは浮かんでは消えるはかないもので、断片的、部分的である。命を支える根源である授乳は子どもにとっては死活問題であるがゆえに、何よりその外的世界の中から五感を駆使して部分が集められ、ひとつのまとまりを作り上げていく。最初のまとまりは、子どもにとって関心の高い乳房である。関心の高低という認識や判断以前に、本能的に、つまり衝動や感情によって向かわされているとも考えられる。その重要性に依存・従属、つまり根源的に影響される形で内的世界は形成される。子どもを自然で自明な方向に導き、心地よさ、充足感、満足感のそれぞれの実現を基礎に、その状態ではない状態、乳房がない、「不在」の場合などは、そこに乳房の存在を想像（空想）し、その乳房に随伴していた充足、満足をも想像することになる。また満足に随伴して良い乳房も想像される。この想像は子どもの命を支える空想である。乳房の不在は、一方で悪い乳房の存在を想像させる場合もある。不在ゆえに良いものを、不在ゆえに悪いものを想像するなど、空想形成は多様であり、その時の子どもの内的世界の状態に関係する。乳房の存在と不在、快と不快の組み合わせの中で、乳房存在の快と不快、乳房不在の快と不快、快と不快に伴う乳房存在と乳房不在、そこから空想が感情（愛憎等）や衝動（破壊）を、あるいはその感情や衝動が空想を、それぞれの状況に応じそれぞれが多様多様に内的世界が形成されている。これらの中で、子どもの命が十分に支えられ、快や充足感をもたらす乳房等は「良い乳房」、反対に命の危機や不快、不満をもたらす乳房は「悪い乳房」として対象化される。そして良いがゆえに愛されまた憎まれ、悪いがゆえに愛されまた憎まれる。存在や不在、愛憎・衝動の力動により形成された「良い乳房」を愛し、また乳房側からも愛されていると空想する。一方

「悪い乳房」へは破壊的空想や願望が向けられ、それを憎み、またそれから憎まれていると空想する。この破壊的空想の中における攻撃性はその空想の中だからこそ実現すると思っている。つまり悪い乳房は破壊され（噛み碎き、引きちぎり）つつあり、また破壊（断片的に解体）されたものとして空想するのである。それぞれの乳房という対象に対応するように子ども（自己）の方も断片化されており、良い乳房には良い自己が、悪い乳房には悪い自己が、つまり乳房に限らないが、快を感じさせる対象には良い自己が、不快や苦を感じさせる対象には悪い自己が、それぞれ心地よさ（愛や安心）の自己と苦痛（憎や不安）の自己として感じている。この両者の対象の分裂において自己も対象と共に分裂する感覚を生じさせる。

これら人が背負った宿命である本能に関わらせられる形で自己や対象、それらがまたそれぞれが相互に作用し合い、その結果として人の内面世界、外界や現実世界が形成される。特に授乳時期、子どもは自己自身の内部から発生する口愛的サディズムに自分自身が翻弄される。「個体自体のサディズムについていえば防衛はこれを放逐し、一方、対象についていえば防衛はこれを破壊する。そしてサディズムは危険の源となる。というのは、それは不安の解放という機会を作り出すし、また、対象を破壊するために用いられる武器がその個体には自分自身に対しても同じように向けられるといったふう感じられるからである」<sup>15</sup>つまり子どもの周りは、空想ではあるが不安なものに取り囲まれている。人は、その最初から不安と向かい合うことになる。「未発達の自我はこの時期にそれを完全に超えた仕事—すなわち、最も激しい不安に勝つという仕事—に直面させられる」<sup>16</sup>。「サディスティックな空想は、外界や現実に対する最初で基本的な関係を作り上げ、個体がその後現実に対して外的世界をどのくらいまで自分のものにできるかは、この時期をどのくらいうまく通りこせるか」<sup>17</sup>にかかっている。「自我の発達や現実との関係は、最早期における不安状況の圧力にどこまで耐えられるかという、早期の自我の能力にかかっている。そして普通は、それはそれに関係するいろいろな要因がどのようにほどよくバランスをとっているか、という問題である。不安が十分にあるということは、象徴形成の豊かさや空想の豊かさに必要な基本条件」<sup>18</sup>なのである。ここからいえることは、口愛サディズムが自己の不安を喚起し、その不安に対処する形で、特

に母親の身体に向けられた空想、尿道愛的サディズムや肛門愛的サディズムとして、「排泄物は危険な武器に」「おもらしは切ったり刺したり火をつけたり水浸しにしたり」「糞塊は武器や飛び道具」「時期の後半になると、、、サディズムが工夫できる最も手の込んだ隠れ襲撃という形に変化する。かくして、排泄物は有毒物質と同等に」みなされる。<sup>19</sup>ここでクラインは、「象徴の前駆である同一化は赤ん坊があらゆる対象の中に自分自身の器官と機能とを再発見しようとする試みから生ずる、、、快感原則は快感や関心に特徴づけられた類似性ゆえに、2つのまったく異なったものを同一とみなすことを可能にする」<sup>20</sup>というフェレンツィとジョーンズの見解を紹介している。

このような不安な対象が、子どもの関心の基礎、そして象徴の基礎となり、その象徴が空想の基礎を作り、現実の基礎ともなるのである。

さて、子どもにとって、心地よさより苦痛が圧倒的だった場合、つまり生の本能より死の本能が優性だった場合、生の本能によって組み立てられつつある自己や対象を防衛するために、死の本能によるサディズムを放逐し、その対象を破壊する方向へ駆り立てられる。この対象への破壊は自己にも向けられてくると空想されるため、不安は非常に高まってくる。自己が、特に良い自己が破壊されそうになる不安の中で、サディズム（攻撃性を持つ悪い自己）を分裂させる。このつまり母親の身体、悪い乳房などにそれが所属すると思い込む、つまり投影する。これによって、悪い自己と悪い対象は融合し、母親は別人ではなく、悪い自己と感じるようになる。それは母親を支配し、さらに悪い対象と自己、悪い対象は自己のサディズムが加わって破壊性や攻撃性はいっそう増大する。死の本能が分裂し、対象に投影されたことにより、悪い対象、迫害者、迫害的乳房から良い自己への攻撃という形に変化する。この心的メカニズムにより、被害感が出現する。

この迫害的な乳房から自己を防衛するため、理想化により良い乳房が誇張されたり、理想の乳房へと想像されたりもする。また悪い対象そのものとそれによる苦痛が否認され絶滅される場合もあり、これは内的、外的現実の否認と結びつき、加えて対象関係も否認され、悪い対象への感情を喚起する自我の一部も否認され絶滅させられる（事例の前半に対応）。

ここでは、家族や素因、死の本能に翻弄されながらも、母親を愛し、自分を賢明に守っている子どもの純粹さに焦点を当てる。子どもの純粹さは、何も昔の自分自身ではない。大人になった今においても、子どもという形相が宿っている。幼いながらも世界を背負い、世界に差し向けられた子どもの存在、死の本能に翻弄された子どもの生、この存在と死の本能は、存在論的、存在的という意味ではまったく次元の違うものではあるが、解釈し直すことで、多くの共通性と類似性を発見できる。それが対人援助に生かされ、クライアントの生活不安を軽減させるものであれば、理論の違いは本質的なことではない。

後半では、精神医学分野にHeideggerの存在論を取り入れたBossの技法を把握しつつ、死の本能に関係する死への存在、対象関係論で扱う不安とHeideggerの不安を中核に見据え、対象関係論の存在論的基礎付けを試論し、事例研究という形で考察してみようと思う。クライアント自身が自らの運命(存在)を時間性の脱自体の中で引き受け、それに援助者が呼び求められる形でクライアントの症状が改善していくという、存在論によって基礎付けられ直された対象関係論をBossの人間理解のもとに、存在可能性の核心に迫ってみたいと思う。

## 参考(引用)文献

1. Medard Boss.(1957). *PYCHOANALYSE UND DAEINSANALYTIK*. Verlag Hans Huber, Bern. ボス、メダルト『精神分析と現存在分析論』笠原 嘉、三好郁男訳、みすず書房、1962、pp.85.
2. 前掲書、pp.190.
3. 前掲書、pp.190.
4. 前掲書、pp.190.
5. ハイデガー、マルティン『現象学の根本問題』、木田 元監訳・平田裕之・迫田健一訳、2010、pp.460.
6. 前掲書、pp.283-286
7. 前掲書、pp.216.
8. M.Heidegger : Sein und Zeit,Max Niemeyer, 1979 ハイデガー、マルティン『存在と時間』(上)細谷訳、ちくま学芸文庫、1975、pp.267-268.

9. Medard Boss(1987). *MARTIN HEIDEGGER ZOLLIKONER MINARE*, Vittorio Klostermann, Frankfurt am Main. メダルト・ボス編『ハイデッガー ツォリコーン・ゼミナール』、木村 敏・村本詔司訳、みすず書房、1991.
10. 前掲書、pp.316.
11. 前掲書、pp.316.
12. 前掲書、pp.283
13. 渡辺二郎編集（1980）『ハイデガー「存在と時間」入門』有斐閣、pp.66
14. 前掲書、pp.299.
15. クライン、メラニー、「自我の発達における象徴形成の重要性」、『メラニー・クライン著作集-1 子どもの心的発達』所収、小此木敬吾他訳、誠信書房、1983、pp.266
16. 前掲書、pp.266
17. 前掲書、pp.267
18. 前掲書、pp.267-268
19. 前掲書、pp.267
20. 前掲書、pp.267